

## <前回：ヨブ記を読む>

### (1) ヨブ記の概要

1. 人生の謎(悪・罪・不幸・不条理・無意味・不正義)に対して、宗教は何を語るのか。  
謎に直面するときに、宗教の真価が問われる。
2. ヨブ記をどのように読むか。
  - ・散文体での枠組みの位置づけの問題
  - ・文学作品としてのヨブ記 → 思想にとって文学とは何か。
3. 明確な論点とわかれる論点
  - ・因果応報の破綻後の世界
  - ・ヨブは納得・了解したのか、救われたのか。
4. ユングのヨブ解釈  
「神の変容」のプロセスにおけるヨブ記の意義。
  - ・ヨブの道徳的な優位
  - ・非合理的で暴虐な神から合理性を有する神(神の人間化)へ  
悪の問題への対処
5. 並木浩一『ヨブ記の全体像』(並木浩一著作集1) 日本キリスト教団出版局、2013年。

### (2) 神義論と知恵思想

6. 神義論を、知恵の問題として考える。新約聖書学(クロッサン)において、慣習的知恵と転換的知恵として取り出されたものを枠組みとして、そこに神義論を挟み込む。その場合、神義論は、次のような三段階のプロセスに整理される。
7. 前提は慣習的知恵である：因果応報を原理として、共同体の道徳的秩序を基礎づける。悪や不幸の問いは、まず、この段階で取り扱われる。社会が安定している場合には、これで多くの問題は処理できる(罪を犯したから罰を受ける)。
- 1) 災害や人災で、多くの不幸が現象した場合(神義論1)：この段階では、因果応報は自明性を大きく喪失し、悪の問題は慣習的知恵では納得できないことになり、いわゆる神義論が問題化する。
- 2) 神義論2：隠された理由の示唆。神の意志・意図は人間には計りがたく神秘に閉ざされているが、現実の悪の背後には、神の意図・計画が存在するとされる。予定調和説。
- 3) 神義論3：しかし、悪の現実が極限に達するとき、神義論2は挫折する。この先は、二つの可能性がある。一つは、「神の不在」であり、もう一つは、「超越者の無能」である。後者は、ユングが解釈したヨブ記が典型。
8. 以上の神義論の三段階の展開は、最終的に、特に、「超越者の無能」をもう一度転倒する仕方、転換的知恵＝革命論へ、到達する、と解してはどうだろうか。しかし、転換した先が、更新された慣習的知恵であると解するとき、議論は、どうなるだろうか。

### (3) 神義論と哲学

9. 大澤真幸『夢よりも深い覚醒へ——3・11後の哲学』岩波新書、2012年。

## 9. 黙示文学と社会批判

### (1) 終末論と黙示文学

1. 「終末論」：終末論という用語はキリスト教神学の範囲に限定してもきわめて広範な意味を持っており、それを厳密に定義することは容易ではない。終末論とは直接的には「最後の・究極的事柄についての理論」を意味するが、この「最後」「究極」という言葉の意味をどう解するか——時間的意味における最後か、あるいは論理的意味での究極かなど——、また、誰・何にとっての終末を論じるか——個人の終末か、あるいは歴史的共同体や、宇宙全体の終末か——、によって、その意味内容は様々である。
2. 終末論の前提
  - ・創造から終末へと向かう歴史プロセスという枠組み
  - ・善悪の最終決着(正義)への要求

善悪の最終的決着の時・罪の問題の最終的解決＝歴史（創造から終末）の完成  
→ 神との完全な関係の実現・本来的な人間性、正義の実現

3. 終末論 (eschatology) : モルトマン『神の到来』新教出版社。

- ①永遠の生（個人的終末論）：魂の不滅、肉体のよみがえり、永遠の生命、煉獄
- ②神の国（歴史的終末論）：千年王国論、歴史の終わり、黙示的終末論、万物の復興、最後の審判
- ③新しい天・新しい地（宇宙的終末論）：創造の将来、世界の滅亡・世界の変容・世界の神化、終末論的エコロジー
- ④栄光（神的終末論）：神の自己栄光化、神の自己実現、神の充満と永遠の喜び

4. 終末論の類型：預言者的終末論、黙示的終末論

5. 「黙示的終末論」：黙示的終末論とは、終末を世界それ自身の終わりとして、「最後の審判、復活、新しい時代の幕開けに対する待望」といった観念で捉える終末論の一類型であり、とくに聖書に収められたダニエル書やヨハネ黙示録などの黙示文学において描かれた終末理解を原型とする。この際、終末は天変地異やハルマゲドン（神・天使とサタンの両軍における最終戦争）といった宇宙的イメージによって、ドラマティックに描かれている。これは、聖書学においては、ダビデ王朝という過去の理想的な黄金時代の再建によってイメージされた預言書の終末論としばしば対比されることがある。しかし、この終末を世界自体の終局としてイメージする黙示的終末論は、キリスト教思想史の中において、より一般的な歴史神学へと展開されている。たとえば、フィオーレのヨアキムの終末論は、その典型である。聖書学の観点からは、黙示文学の終末理解に対して、「黙示文学的終末論あるいは終末観」という用語を用いることも可能と思われる。後のキリスト教思想における歴史神学に展開された終末論も含めて、黙示的終末論。

6. 宇宙的ヴィジョン（ドラマ化）→ 罪と悪に対する勝利、ハルマゲドン  
バビロン捕囚以降の状況・ゾロアスター教の存在

- 1) ヘレニズム的な文化環境への適応
  - 2) 民族宗教の再建 → 普遍化：預言者、知恵
- 黙示文学：ダニエル書、エズラ書、ヨハネ黙示録（アポカリプシス）

<テキスト>

1. イザヤ 11 章

11:11 その日が来れば、主は再び御手を下して／御自分の民の残りの者を買戻される。彼らはアッシリア、エジプト、上エジプト、クシュ、エラム、シンアル、ハマト、海沿いの国々などに残されていた者である。12 主は諸国の民に向かって旗印を掲げ／地の四方の果てから／イスラエルの追放されていた者を引き寄せ／ユダの散らされていた者を集められる。

2. マラキ 3 章

3:17 わたしが備えているその日に／彼らはわたしにとって宝となると／万軍の主は言われる。人が自分に仕える子を憐れむように／わたしは彼らを憐れむ。18 そのとき、あなたたちはもう一度／正しい人と神に逆らう人／神に仕える者と仕えない者との／区別を見るであろう。19 見よ、その日が来る／炉のように燃える日が。高慢な者、悪を行う者は／すべてわらのようになる。到来するその日は、と万軍の主は言われる。彼らを燃え上がらせ、根も枝も残さない。20 しかし、わが名を畏れ敬うあなたたちには／義の太陽が昇る。その翼にはいやす力がある。あなたたちは牛舎の子牛のように／躍り出て跳び回る。21 わたしが備えているその日に／あなたたちは神に逆らう者を踏みつける。彼らは足の下で灰になる、と万軍の主は言われる。22 わが僕モーセの教えを思い起こせ。わたしは彼に、全イスラエルのため／ホレブで掟と定めを命じておいた。23 見よ、わたしは／大いなる恐るべき主の日が来る前に／預言者エリヤをあなたたちに遣わす。24 彼は父の心を子に／子の心を父に向けさせる。わたしが来て、破滅をもって／この地を撃つことがな

いように。

## (2) 抵抗文学・社会批判

B.C.1000年頃：統一王国時代（ダビデ・ソロモン王朝）

922年：イスラエル王国とユダ王国への分裂

721年：イスラエル王国、アッシリアによって滅ぼされる

597年：第一回バビロン捕囚

587年：第二回バビロン捕囚、ユダ王国の滅亡

583年：第三回バビロン捕囚

538年：ペルシャ王キュロスによる解放令

332年：アレクサンダー大王、シリア・パレスチナを併合

301年：パレスチナ、プトレマイオス朝エジプトの支配下

167-162年：マカバイ戦争

142-63年：ユダヤ・ハスモン王国時代

63年：ユダヤ、ローマ属州シリアに編入

A.D.6年：ユダヤ、ローマ帝国属州となる

7. ユダヤ思想から新約へ、終末論の類型：預言者的、黙示的 → 意味の拡張

8. イエス時代の通常の「神の国」理解：預言者的終末論、黙示的終末論

↓

イエス運動における「神の国」の意味の転換＝隠喩化（言語化・テキスト化）

善人が入ることができる神の国 → 罪人が招かれる神の国

9. 迫害・抵抗文学 → 象徴、暗号

獣、「大バビロン、みだらな女たちや、地上の忌まわしい者たちの母」、666

10. 善と悪の最終的戦いと善の勝利（ハルマゲドン）：

1) 善悪二元論

2) 秘密の隠された知恵

3) 終末・時の切迫の実感 → 迫害下の教会への励まし（最後まで耐え忍ぶ者は幸いである、命の書）

4) 宇宙論的劇的イメージ → 民族の枠組みの克服、宇宙論的メシア

11. 富者批判の系譜：

(1) 預言者の富者批判・弱者の視点、正義＝神の下の平等

「災いだ、偽りの判決を下す者、労苦を追わせる宣告文を記す者は。彼らは弱い者の訴えを退け、わたしの民の貧しい者から権利を奪い、やもめを餌食とし、みなしごを略奪する。」（イザヤ 10.1-2）

(2) 黙示文学：富める者の不正はこの世界の悪の支配の徴。神の国ではこの秩序は逆転。

「わざわざいなるかな、きみたち富める者。きみたちは、自分の富を頼みとした。しかし、きみたちは、自分の富を失うであろう」（エチオピア語エノク 94.8）

(3) イエスの富者批判。

「貧しい人々は、幸いである。神の国はあなたがたのものである」、「しかし、富んでいるあなたがたは、不幸である。あなたがたはもう慰めを受けている。」（ルカ 6:20-25）

(4) マリアの讃歌。

「思い上がる者を打ち散らし／権力ある者をその座から引き下ろし／富める者を空腹のまま追い返されます」、「身分の低い者を高く上げ／飢えた人を良いもので満たし」（ルカ 1:47-55）

(5) 初期キリスト教会と愛の共産主義（財産の共有）。

「信じた人々の群は心も思いも一つにして、一人として持ち物を自分のものだと言う者はなく、すべて共有していた。」（使徒言行録 4:32）

## <テキスト>

### 1. I コリント 7 : 26-31

26 今危機が迫っている状態にあるので、こうするのがよいとわたしは考えます。つまり、人は現状にとどまっているのがよいのです。27 妻と結ばれているなら、そのつながりを解こうとせず、妻と結ばれていないなら妻を求めてはいけません。28 しかし、あなたが、結婚しても、罪を犯すわけではなく、未婚の女が結婚しても、罪を犯したわけではありません。ただ、結婚する人たちはその身に苦勞を負うことになるでしょう。わたしは、あなたがたにそのような苦勞をさせたくないので。29 兄弟たち、わたしはこう言いたい。定められた時は迫っています。今からは、妻のある人はない人のように、30 泣く人は泣かない人のように、喜ぶ人は喜ばない人のように、物を買う人は持たない人のように、31 世の事にかかわっている人は、かかわりのない人のようにすべきです。この世の有様は過ぎ去るからです。

### 2. マタイ 25 : 1-13

1 「そこで、天の国は次のようにたとえられる。十人のおとめがそれぞれともし火を持って、花婿を迎えに出て行く。2 そのうちの五人は愚かで、五人は賢かった。3 愚かなおとめたちは、ともし火は持っていたが、油の用意をしていなかった。4 賢いおとめたちは、それぞれのともし火と一緒に、壺に油を入れて持っていた。5 ところが、花婿の来るのが遅れたので、皆眠気がさして眠り込んでしまった。6 真夜中に『花婿だ。迎えに出なさい』と叫ぶ声がした。7 そこで、おとめたちは皆起きて、それぞれのともし火を整えた。8 愚かなおとめたちは、賢いおとめたちに言った。『油を分けてください。わたしたちのともし火は消えそうです。』9 賢いおとめたちは答えた。『分けてあげるほどはありません。それより、店に行って、自分の分を買って来なさい。』10 愚かなおとめたちが買いに行っている間に、花婿が到着して、用意のできている五人は、花婿と一緒に婚宴の席に入り、戸が閉められた。11 その後で、ほかのおとめたちも来て、『御主人様、御主人様、開けてください』と言った。12 しかし主人は、『はっきりしておく。わたしはお前たちを知らない』と答えた。13 だから、目を覚ましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないのだから。」

### 3. ヨハネ黙示論 20章

1 わたしはまた、一人の天使が、底なしの淵の鍵と大きな鎖とを手にして、天から降って来るのを見た。2 この天使は、悪魔でもサタンでもある、年を経たあの蛇、つまり竜を取り押さえ、千年の間縛っておき、3 底なしの淵に投げ入れ、鍵をかけ、その上に封印を施して、千年が終わるまで、もうそれ以上、諸国の民を惑わさないようにした。その後で、竜はしばらくの間、解放されるはずである。4 わたしはまた、多くの座を見た。その上には座っている者たちがおり、彼らには裁くことが許されていた。わたしはまた、イエスの証しと神の言葉のために、首をはねられた者たちの魂を見た。この者たちは、あの獣もその像も拝まず、額や手に獣の刻印を受けなかった。彼らは生き返って、キリストと共に千年の間統治した。5 その他の死者は、千年たつまで生き返らなかった。これが第一の復活である。6 第一の復活にあずかる者は、幸いな者、聖なる者である。この者たちに対して、第二の死は何の力もない。彼らは神とキリストの祭司となって、千年の間キリストと共に統治する。7 この千年が終わると、サタンはその牢から解放され、8 地上の四方にいる諸国の民、ゴグとマゴグを惑わそうとして出て行き、彼らを集めて戦わせようとする。その数は海の砂のように多い。

・田川建三「終われない終末論」(『キリスト教思想への招待』勁草書房)

「この人は新約聖書の著者たちの中で、いや古代地中海世界のすべての著者の中で、この書の経済問題について非常に敏感で、知識を持っている。」(277)

「ローマ帝国支配の要は地中海の支配である。」「皇帝崇拜」「ローマ帝国の支配力の基本は貨幣にある。」「資本は国境を越える」「共通言語を必要とする。」「神殿がない」。

### (3) 社会的構想力——イデオロギーとユートピア

#### 1. イデオロギーの三つの次元

現実の転倒としてのイデオロギー／正統化としてのイデオロギー／象徴的統合化・自己同一性としてのイデオロギー

象徴体系によって行動は媒介される、行動は意味の了解を前提とする。世界を理解し行動するには意味世界をイメージにもたらず象徴体系を

現実(集団と個人の)を保持するイメージ、社会的行動を律する秩序形式を保持する構想力

↓

保守的効能

#### 2. ユートピアの諸次元

- ・病理としてのユートピア／批判としてのユートピア／可能性の領域を開くユートピア
- ・歴史的現実とは異なる現実(本来性?)を描き共有する能力

↓

「異端的」と呼ばれた民衆運動は何だったのか

キリスト教史の根本問題

#### 3. 生の弁証法：自己同一性と自己変化 → 成長する、あるいは生きている

#### 4. 信仰は究極的にはイデオロギーかユートピアかの二分法の拒否である。

自己同一性は信仰に基づく

「あなたの神である主を愛する」→「あなた」と「神」の相関性としての信仰

信仰は、自己同一性に形を与えそれを保持する、と同時に、自己同一性の転換を可能にする。

↓

終末論あるいは希望の弁証法：希望のヴィジョン  
すでに、そしていまだ

↓

#### 5. 自己同一性と自己変革(ミメシスの弁証法)

#### 6. イメージの共有、

#### 7. 象徴・言語・構想力という視点から理論を再構築すること。

#### 8. 意味世界の転換とユートピア

- ・意味世界(システム)AとB、意味根拠aとb、

転換：A→Bに際して、意味根拠は競合する諸意味世界に対して、正当化と転換(批判)という二重の機能を果たす。

意味根拠の正当化機能＝イデオロギー、転換(批判)機能＝ユートピア

宗教は、本来イデオロギーとユートピアの二重性において機能しているのである。

- ・「宗教は、現状の秩序を維持することに限らず、革新的な制度の導入をも正当化するために用いられる。『ローマ史論』は、その豊富な実例をあげている。こうしてマキャベリは、宗教の社会的機能と基本的重要性とを認識したのみでなく、それを一般的に理論化することも試みている。」(宮田光雄『国家と宗教——ローマ書十三章解釈史＝影響史の研究』岩波書店、2010年、123頁)

### (4) ピューリタニズムと民主主義

#### 1. 17世紀のイギリスにおけるピューリタニズムと近代民主主義との関係。

- ・「パトニー討論」(1664年10月28日から30日)と法哲学者リンゼイの解釈

革命の中、軍隊の急進派から出された「人民協約」(An Agreement of the People for a firme and present Peace, upon grounds of common right and freedome)の審議のため、

ロンドン郊外のパトニーの教会堂で開かれた軍幹部会議が開かれた。

- ・ピューリタン革命：絶対王政と共和制という政治システムをめぐる戦争であると共に、イギリス国教会制度とピューリタニズム（これには、多様な宗教的主張が含まれるが、国教会制度を越えて宗教改革をさらに推進するという点では一致していた）という、宗教的な意味根拠をめぐる闘争でもあった。
- 2. 宗教的な根本理念（意味根拠）のレベルにおける選択：絶対王政と国教会制度を支える階層的秩序か、宗教改革の万人祭司（神の前の平等主義）か、というだったのである。  
軍幹部（クロムウェル、アイアトン）とレヴェラーズ（レインバラ）との間の成人男子普通選挙権などをめぐる討論。  
リンゼイ：パトニー討論に表れた民主主義の三つの基本原理を概観することによって、ピューリタンの宗教的精神性（意味根拠）と民主主義（意味世界）との相互関係。
- 3. 同意の原理：レインバラ大佐（レヴェラーズの代表）  
イングランドで最も貧しい人といえども、最も大いなる人と同様に、生きるべき生命を持っていると本当に思うからである。それゆえ、実際のところ、よろしいか、ある政体の下で生きねばならぬ人は誰であれ、まず自分自身の同意によって我が身をその政体の下に置くべきだということは明確だと思われる。それに、イングランドの最も貧しい人でも、厳密な意味では、我が身をその下に置くための投票権を持たされていない政体になど、少しも縛られはしないのではなかろうか。  
(パトニー討論、1999、176)
- 4. 民主主義：主権者としての国民の同意が必要。国民の普通選挙権の要求。  
しかし、私はその選挙権という所有権が、イングランド王国においては、他の何者にも勝れて貴族や郷紳や特定の人たちに属する所有権であることを否定する。  
(パトニー討論、1999、190)

↓

政府や権威者が国民に対する約束（契約）を破った場合には、国民の側に抵抗する権利を認める。「人民協約」（レヴェラーズ）は、「自然法に基づく自己保存と抵抗権」を主張するものであり、レヴェラーズはこうした理念に基づく政治システムの樹立を目指した（大澤、1999、29、44）。

- リンゼイ：同意の原理や抵抗権の基礎にあるのは、人間に生得的な人権という観念。宗教改革的な神の前に立つ人格的な一存在者（信仰者）という点で、聖職者も平信徒も平等である、という万人祭司の精神。
- 5. 討論の原理：同意は討論の結果到達されるものであって、決して討論の前提ではない（クロムウェル）。  
クロムウェルにとっては、民主主義機構の目的は、各人の抑え難い良心が語る事柄に耳を傾けることによって、また神の意志を学ぼうと望んでいるひとびとの、率直で忌憚のない討論にもとづいて、見出されねばならないなにかを看破し、発見することにあります。（リンゼイ、1964、32）  
関係者全員の同意から出発することではなく、むしろ、意見の「不一致と批判を容認し、かつ要求」すること、「各人の相違を認めた上での平等」（リンゼイ、1964、61、63）  
反対政党の存在を許さない政治は、もはや民主主義とは言えない。
- 6. 討論の原理は、「キリスト教の集会の経験」（リンゼイ、1964、32）に基づいている。  
キリスト教の集会：「神の意志」を発見すること。それは、異なる意見を持った者たちの討論による。各自が所有する神の意志についての異なる諸部分の知識を討論の中で語り合い、共有し合うときにはじめて、神の意志は十分な仕方、発見される。  
クロムウェルにとっては、同意は結果であっても条件ではなかったのであります。かれは、民主主義の条件とは、それに関係するすべてのひとびとが、かれら自身の意志を表明しようと努めることではなく、神の意志を表明しようと努力することであると考えていました。このことは、ひとびとが、すすんで、他人と自由に、

しかも隔意なく議論を進め、そして、その時の事態についてかれらのもつ知識と経験のすべてを用立たせようとする限り、たとえ誰であっても、その〔神の意志〕発見にあずかり得るのだということを、なにほどこか意味していたのであります。

(リンゼイ、1964、35)

#### 7. 集いの意識

- ・民主主義の弱点(?)：集団の規模が大きくなり、討論が代表者の手に委ねざるを得なくなるときの(=代議制)、主権者である国民と代表である政治家との間に存在する隔たりから、様々な弊害が生じることになる。

そこに欠けているのは、「集いの意識とでも呼ばるべき不思議な雰囲気」(リンゼイ、1964、38)。代表者である政治家が、国民の代表としての責任を自覚しつつ、議会という討論の場に集うとき、討論は民主主義の名にふさわしいものとなる。

しかし、実際、私が言及したいのは、次のことにほかならない。すなわち、私が主の御前において心から確信しているごとく、我々を一つに統合することに、〔そして、〕神が遂行を望んでいると我々に開示されていることに資すること、がそれである。そして、そういう心でここに会してはならず、自分はそういうことに味方するものではないと敢えて口にする者、私はそういう者をパテント師なのではないかと思う。

(パトニー討論、1999、86)

- 8. 集いの意識は、ピューリタンの集会という「宗教的民主主義の基盤」の中で体験されていたものであった。

このことは科学的な理論でもなければ、常識からくる教えでもありません。じつに、宗教的かつ道徳的な原理なのであります。これは、すべての信仰者は精神的〔霊的〕には祭司であるということ、神学的でない言葉にいい換えたにすぎません。

(リンゼイ、1964、19)

- 9. 人権の平等性という理念：中世の封建制や近代の絶対王政の下にあっては、未だ存在しないユートピアに属する理念だった。

不平等と不自由という現実において提示された自由と平等はユートピアの理念。

宗教的精神性に基づくイマジネーションの産物であったとしても、決して無意味な幻想などでなかったことは、その後の歴史の示すとおり。

↓

終末思想：日常的で常識的な現実感覚を越えたユートピアの理念を、生き生きとしたイメージによって開示する場として機能してきた。

#### <参考文献>

1. 岡田明憲 『死後の世界』講談社現代新書。
2. 芦名定道・小原克博 『キリスト教と現代——終末思想の歴史的展開』世界思想社。
3. クロッサン 『イエス——あるユダヤ貧農の革命的生涯』新教出版社。
4. ボーグ 『イエス・ルネサンス——現代アメリカのイエス研究』教文館。
5. 大澤麦 「〈訳者解説〉ピューリタン革命における「パトニー討論」——その背景と政治思想的意義」大澤麦・澁谷浩訳 『デモクラシーにおける討論の誕生—ピューリタン革命におけるパトニー討論—』聖学院大学出版会、1999年。
6. リンゼイ 『民主主義の本質—イギリス・デモクラシーとピューリタニズム—』未来社、1964年。
7. 芦名定道 「ティリッヒのユートピア論」(現代キリスト教研究会『ティリッヒ研究』第3号、2001年、73-82頁)。